

巻頭言

表面分析研究会とイノベーション

私事で恐縮であるが、最近、自分の職歴を振り返ってまとめ、人前で発表する機会を得た。表面分析との関わりは、企業に入社し研究所の材料分析部門に配属されてから始まり、出産や子育ての都合で離れた時期はあったものの、30年以上もの年月、表面分析の実務を担当してきたことに、今更ながら気づかされた。企業においては、ある程度経験を積むと他部門に回されたり、人を管理する立場になって分析業務から離されてしまうことが多いが、幸いなことに、自分は未だに分析装置を直接いじる仕事を続けているし、今後も数年は続けていられそうである。

入社当時は独自開発のAES装置が立ち上がったばかりで、間もなく前任者が寿退社したため一人でその装置を担当することになった。その後、市販装置が続々と発表され始めたばかりのXPSを導入し、担当するようになった。表面分析の実務経験年数で自分の右に出る者は社内にはいないし、ひょっとしたら、日本いや世界にもあまりいないのではないかと思う。表面分析そのものの知識を深めるためには、最初から外に出ていくしかなかったし、学会参加を勧めてくれる環境(職場と家族)にも恵まれていた。それでも30年前には、表面分析そのものの議論については、応用物理学会の中で数件の発表があるだけだった。もちろん、応用例の発表は、特に金属や半導体分野で盛んに行われていたが。

子育ての都合で3年余りいた他部門から分析部門に戻ってしばらくしてから、表面分析研究会SASJが設立されていることを知り、御殿場のNTT研修所で開催された研究会に初めて参加した時の衝撃は忘れられない。興味のない講演が二日間もある上に、昼間はもちろん、夜遅くまで表面分析そのものについて語り合っていた。以来、SASJの虜になっている。

最初のうちは、ともかく何かしらの情報を得たいという考えで参加していたが、鈴木峰晴さんが「最近Give & TakeではなくTake & Takeの傾向がある」というようなことを話されたことに触発され、ここ数年はSASJにおいて編集理事を担っている。まさしく「虜」になってしまった感じがしなくもないが、私にとってはイノベーションと言ってもいいできごとであった。

今年2月の第38回研究会で「企業の分析部門における人材育成の現状と将来」と題したパネルディスカッションが行われた。講演委員長の吉川英樹さんがそのレジュメに書かれた「オープン・イノベーション」の場がSASJであると、改めて思う。SASJがそうあり続けるためにも、Takeだけを求めて参加するのではなく、若い人達こそGive & Takeを心がけてほしい。自分自身のイノベーション、少なくとも育成に繋がるからである。昨今のせちがらい企業環境の中では、出席することさえ困難になってきている現実はあるが…。また、意欲を育むには何が大切かというようなディスカッションの中で、ある人が言った「僕はXPSが好きです」という言葉に皆納得していた。手法が何ということではなく、表面分析が「好き」という思いを大切にしていきたい。

JSA 編集理事・富士通クオリティ・ラボ株式会社 佐藤 美知子